図書館通信　２・３月号　宇東図書委員会

商業科１年生は、２ 月 ４ 日から６日までインターンシップで様々な職場を訪れました。インターンシップの感想の中には、「初めてのことばかりで戸惑ったが、少しずつ任された仕事ができるようになって嬉しかった」「根気のいる作業だったが、その分、達成感があった」という意見が多くありました。働くことの大変さややりがいを感じることができた貴重な体験だったようです。

今月は、「働くとはどういうことか、何のために働くのか、」といったことについて、考えさせられる２冊の本を紹介します。また、開発途上国の現状や現場で活躍する人々の姿を紹介する JICA 広報誌『mundi』の中から、アフリカでのイノベーションプロジェクトを紹介します。

『もっとやりたい仕事がある！』　池上 彰　著・監修

世の中には、実に多くの仕事があります。中には、「こんな仕事もあったんだ」と驚くようなものもあるはずです。仕事の中には、うまくいけば、それなりの高収入が期待できるものも、いくら頑張っても、金銭的にはあまり期待できないものもあります。しかし、どの職業に就いている人たちも、「これが自分のやりたかった仕事だ」と、生き生きと働いているはずです。働くということは、お金だけが目的ではないということを、この本に出てくる人たちが教えてくれます。

『働くということ』　日本経済新聞社　編

何故働かないって、そりゃ僕が悪いんじゃない。つまり世の中が悪いのだ。……働くなら、生活以上の働きでなくっちゃ名誉にならない。……食うための職業は、誠実にゃ出来悪（にく）い。　――夏目漱石『それから』

いつの時代も、人々は「働く」ことについて悩み、惑い、様々な選択を迫られてきました。単に生活の糧を得るだけ、豊かな社会にあって食べていくだけ、が目的であるなら、さほど苦労しなくてもやっていけます。

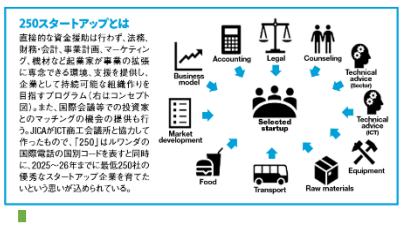
むしろ、いまが豊かであるがゆえに、一人一人が「どう生きるか」という根源的な問題に向き合わざるを得なくなっているともいえるでしょう。「働く」ということを真剣に考えなければならない。そんな時代なのです。

宇東図書館通信×『mundi』２月号　“mundi”とはラテン語で“世界”という意味があります。

アフリカ　イノベーションで未来を変える

――ビジネスが変わる

ICT 立国として生まれ変わりつつあるルワンダ。2018 年 12 月、首都キガリで若きルワンダ人起業家８組が新たな ICT ビジネスについて熱く議論を交わした。これは、JICA が起業環境の強化のためスタートした「250 スタートアップ」プログラムの最終報告会だ。中でもイマニ・ボラさんは「物流サービスアプリの開発」についてのプレゼンテーションで注目を集めた。



企業名 ハッチプラス

鶏卵のモニタリングと遠隔操作をスマートフォンなどでできる自動ふ化器を開発。代表のイマニ・ボラさんは24歳で、トゥンバ技術高等専門学校の講師も務める。「ルワンダは鶏肉や卵の約80%を輸入に頼っており、価格も高い。その課題を知り、自分にできることはないかと思って開発しました」。

自動ふ化器。大きいものだと一度に3,000個の卵を管理できる。「2年をかけて6度目のテストでようやく完成しました。ここまで長い旅でした」とボラさん。

――暮らしが変わる

銀行まで何十キロも離れた比電化地域のキヨスクで農民たちが使用するのは、現金をチャージしたカード。電子マネー経済圏の広がりは、農家の生活向上とデータ化による生産性の高い農業の拡大に役立つ可能性を秘めている。

現金から電子マネーへ変わったことで、お金の管理が楽になり、計画的に使用しようとする人が増えた。また、今までは「たくさん採れた」という漠然としたイメージでとどまっていた農業の売上も、数字として記録されることで、次の行動につながる貴重な情報になる、と期待されている。

NECの電子マネーシステム。タブレットとICカードをタッチしてデータを読み込む機械、ICカードの三つで運用する。